



## MEDICAL OFFICE

医療の最前線からのワンポイントアドバイス

薬学部 准教授

齋藤義正さいとうよしまさき

# ピロリ菌の話

本年2月より、ヘリコバクター・ピロリ（以下、ピロリ菌）の除菌治療に関する保険適用が拡大されました。これまで、保険によるピロリ菌の除菌治療は胃潰瘍や十二指腸潰瘍などの疾患に限られていましたが、適用が慢性胃炎まで拡大され、ピロリ菌が陽性で、内視鏡検査などで慢性胃炎と診断されれば、保険による除菌治療が受けられることになりました。これにより、今後、より多くの人がピロリ菌を除菌できるようになり、胃潰瘍や十二指腸潰瘍はもちろんのこと、胃がんの予防にもつながることが期待されています。

ピロリ菌はなかなか賢い菌です。胃粘膜に生息する3〜5μm程度の細菌で、螺旋形の菌体に数本の鞭毛がついた構造をしており、この鞭毛を回転させて粘液中を遊泳しています。胃の中には胃酸という強力な酸が存在するために、細菌が胃の中で生息することなどおよそ不可能だと考えられていましたが、ピロリ菌はウレアーゼという酵素を産生し、胃粘膜中の尿素を分解してできるアンモニアが酸を中和するために胃の中でも生きることができなのです。オーストラリアの内科医であったバリー・マーシャル博士は、ピロリ菌の存在をなかなか信じてもらえなかったため、ついに博士自らがピロリ菌を飲み、胃炎になったことでピロリ菌の存在を証明したというエピソードが残っています。博士は、ピロリ菌発見等の功績により、2002年に第7回慶應医学賞を受賞し、2005年にはノーベル医学生理学賞を受賞しました。

ピロリ菌の登場により、これまでの消化器疾患の考え方も大きく変わりました。以前は胃潰瘍や十二指腸潰瘍といえど、「ストレスや過労が原因で起こる病気」というイメージがありました。現在ではむしろ、「ピロリ菌による感染症」という考え方になっていきます。また、一部の胃がんや胃のリンパ腫の発生にもピロリ菌が重要な役割を果たすことが明らかにされており、ピロリ菌を除菌すれば、これらの悪性腫瘍が予防できると考えられています。除菌治療は胃酸を抑える薬と2種類の抗生剤の合計3剤を7日間内服することで行いますが、現行の除菌治療に反応しない耐性菌の増加も予想され、今後解決すべき問題も出てくるでしょう。

ピロリ菌の診断には尿素呼吸気テスト法や血中抗体価による検査などがありますが、いずれも非常に簡単に診断することができません。皆さんも一度自分の胃の中にピロリ菌がいるか、調べてみてはいかがでしょうか？



ヘリコバクター・ピロリ

※1μm（マイクロメートル）=10<sup>-6</sup>m=0.001mm